

法華コモンズ通信

法華コモンズ仏教学林事務局

192-0051 東京都八王子市元本郷町 1-1-9 善龍寺内 FAX 番号 ⇒ 042-627-7227
ブログ <https://hokke-commons.jp> / メールアドレス hokkecommons@gmail.com

巻頭言

要らない宗教・要る宗教

法華コモンズ仏教学林 理事長 西山茂

皆さん、明けまして、おめでとうございます。といいましても、新年早々に能登半島地震と羽田日航機衝突事故がありましたので、おめでたさもかなり減ったように思います。天譴論には科学的根拠はありませんが、日蓮仏教には「立正安国論」があります。つまり、天変地異や戦争・内乱などと「正（義）」（法華経とその精神）との間には関係があるというのです。この立場に立てば、一連の不幸な出来事は、戦争やパルティ券問題（裏金づくり）などを繰り返す人類や日本人への、「止める」というご本仏の警告のように思えてきます。

ところで、今日は、「要らない宗教・要る宗教」について、ともに考えてみたいと思います。とはいえ、「妙法以外の宗教はみな要らない」などというケチ臭い話ではありません。まず、「要らない宗教」の話から始めましょう。では、どういう話なのでしょう？

それは、プーチンのウクライナ侵攻を宗教的に正当化してそれを支持しているロシア正教会の話であるとか、または、執拗にテロを繰り返すイスラーム過激派の話であるとか、あるいは、何千年前も前に書かれた「神の約束の地」カナン（パレスチナ一帯）という旧約聖書の記録をもとに、パレスチナ人を追い出してヨルダン川西側に多数のユダヤ人植民地を作っているイスラエルのユダヤ教右派、などの話のことです。

では次に、「要る宗教」に入るものは何でしょうか。「事」を重んずる日蓮仏教のような宗教が時代や社会の中で力を持つためには、一定程度、時代や社会の中に「巻き込まれる」必要があります。「法華仏教は如蓮華在水である」というと聞こえはいいのですが、この「水」とは「泥水」のことです。ですから、「法華仏教は泥中蓮華である」といったほうがより正確です。日蓮仏教にとって、泥にまみれた世俗社会（の改革）も蓮華もともに必要なものなのです。この世俗社会との「付き合い方」は、重要です。しかし、あえていえば、伝統仏教よりも新宗教のほうが、この「付き合い方」がうまいようです。確かにうまいようですが、ご承知のように、新宗教には教義や儀礼の未熟さもありません。

われわれも、これと上手く付き合って、この世俗社会を変えないといけないでしょう。日蓮仏教



「仏教哲学再考②」

——『大乘起信論を手掛かりに』——

講師 末木 文美士 先生

報告 佐古 弘純

が最終的に目指しているのは、「社会成仏」なのです。ですから、泥にまみれたこの世俗社会と上手く付き合わなければ、「再歴史化」はできないと思います。その点では、俗職をもつ在家信者の存在が大切になります。世俗社会を変えるのは、基本的には、在家信者の力なのです。僧職の皆さんは、彼らの良き指導者であるべきでしょう。

それでは、「要る宗教」とは何でしょうか？ 個人レベルと社会レベルは密接に連動していると思われませんが、端的に言えば、それは、個人レベルでは人々に心身及び物質的な生活満足と生きる希望と勇気を与え、社会レベルでは時代や社会が直面している多くの困難（戦争や内乱、地球温暖化、災害など）に解決策を提示することです。私のいう「四菩薩プロジェクト」も、まだ抹香臭さが残っているとはいえず、この試みのひとつです。

そのためには、われわれが所謂「法華仏教」＝「ドンドコ法華」（里見岸雄が抹香くさい日蓮仏教のこと



西山 茂 先生

を揶揄するという言葉）をいちど脱して、世人と一緒に追求できる世俗的な理想社会を展望しなければならぬでしょう。ハバーマスのいう「公共性への転換」のことです。そのうえで、われわれは、必要な時に「宗教」というクラスターに戻ればいいのです。ところで、「要らない宗教」と「要る宗教」というこのダイコトミーには、多分に価値観や美意識のよきな主観的な要素が入っています。つまり、民族や国家、社会や個人などによって異なってくる、ということです。ですから、私がここで提示したダイコトミーも、あくまでも私個人のものでしかない、ということになります。

さらに、「要らない宗教」と「要る宗教」の相互転換（前者↓後者あるいは後者↓前者）という問題や、両者の一致・不一致という問題もあります。時代や社会が変われば、両者の関係もまた変わります。それから、客観的には「要らない宗教」であっても、当事者の主観においては「要る宗教」であったりもします。このように、両者の関係は、すこぶる複雑で分かりにくいものです。

ですが、ハバーマスのいう「公共性への転換」と私のいう「再歴史化」の問題に、われわれが真剣に取り組まなければ、日蓮仏教の未来は明るい、などとはとてもいえないということだけは確かでしょう。そして、そのための知恵を磨くのが、この法華コモンズ仏教学林のさまざまな講義なのではないでしょうか？

皆さん、今年もともに頑張りましょう！

末木文美士先生による連続講座「仏教哲学再考②」『大乘起信論』を手掛かりに」が開催された。末木先生は、日本仏教研究の最前線で活躍され、数々の功績を残されておられる。講義概要には、『起信論』自体を読みこむというよりは、『起信論』が東アジアでどのように受け止められ、どのように変容したかを、真如・如来蔵・本覚などの概念の展開を含めて考える」と記されている。本講座は、東アジアの仏教に大きな影響を与えた『起信論』を手掛かりとし、東アジア仏教の根本思想について学ぶことを目的としている。

第一回目は、『起信論』の成立問題と『起信論』の伝流と受容について講義された。はじめに先生は、大竹晋『大乘起信論成立問題の研究』（大蔵出版、二〇一八）を参考にし、「大竹氏の北朝成立説（中国撰述）は今後定説化していく」と指摘された。続いて、平川彰『大乘起信論』（大蔵出版・仏典講座、一九七三）を参考に、『起信論』の伝播について解説された。最後に、張文良「鳳潭の『大乘起信論義記幻虎録』について」（『インド哲学仏教学研究』、二〇一八・花

野充道古稀記念論文集』、二〇二〇）を参考に、鳳潭に焦点をあて、「鳳潭は、宗密の『大乘起信論疏』を通じて、散逸した法蔵の『大乘起信論義記』の解釈を理解していたが、東大寺で法蔵の『義記』の写本を発見し、法蔵と宗密との差異（『起信論』の位置づけ等）に気づき、直接に法蔵の『義記』によって『起信論』解釈をする道を開いた」という内容に触れ、講義は終了となった。

第二回目の講座は、前回の補足をする内容となった。はじめに、寛洲鳩『華嚴春秋』（一七六四年）に記されている鳳潭の生涯を紹介された。先生は、「鳳潭の前半生は鉄眼の庇護と影響のもとにその生涯の方向を決定している、それ以後は、泉涌寺で受戒、叡山の安楽院で靈空光謙の講義を聞き、四明知礼の教学を正当なものとして採用した」と解説され、重要となるポイントを示された。次に、鳳潭の著作である『起信論義記幻虎録』の冒頭を引用し、それを出版した理由は、『大乘起信論』に関し、後代（澄観・宗密の唯心論的思想）の解釈を排して、法蔵の原意に迫ろうとしたからである」と説明された。最後に、『釈摩訶衍論』の成立』について簡単に触れられ、講義終了となった。この講義では、鳳潭が「古い形態にさかのぼって原意を求める、文献主義の立場」、「法蔵の重々無尽の縁起説を最高の円教とする立場でありながら、天台（山家派）の四明知礼の性悪説を採用し、華天一致とする立場」であることが明らかとなった。

第三回目の講座は、『大乘起信論』の内容に触れる講義となった。はじめに、平川彰『大乘起信論』（二

二頁）に記されている図表を参考に、『起信論』の組織と体系を説明された。次に、先生は『起信論』の立義分（主題―大乘とは何か―）で説かれる「摩訶衍（大乘）とは衆生一人一人の心である（大乘＝衆生心）」とすることに触れ、「心と世界のあり方として、「世界の一部分としての心（個別）」と「世界を包みこむ心（唯心論）」があるが、『起信論』の衆生心には、その両面がみられる。それをどのよう

に解釈すべきなのか」と問題提起をされた。続いて、心の問題として、ご自身の論文「心という回路―仏教哲学の根幹―」（『未来哲学』四号、六四頁）を参照しながら、瞑想を通して心の究極態に至ると心もまた消えていくという玉城康四郎の心の捉え方、『観無量寿経』で説かれる「是心作仏、是心是仏」の見仏体験、清沢満之の精神内に充足を求める精神主義での弥陀との出会いを取り上げた。そして先生は、「心は仏と衆生を結ぶ回路のようなものであり、自らの精神内に沈潜していったとき、自己の心の最奥



末木文美士 先生

で他者に出会う。その最奥は決して行き止まりではない」とする見解を示され、講義終了となった。この講義は、『起信論』で真如の同一概念とされる「衆生心」とはいったい何なのか、ということがテーマであった。心にすべてが回収されてしまえば独我論に陥り、他者の存在は消えてしまう。はたして、先生が示された「心を突破する要素」が『起信論』に説かれているのが問題となった。

第四回目の講座は、『大乘起信論』の構造とその問題点についての講義となった。はじめに先生は、『起信論』を中心に据えて読まれるようになったのは江戸時代であり、東アジア仏教（日本仏教）の前提となっていたわけではない。東アジア仏教（日本仏教）を如来蔵仏教とするのは無理がある」と指摘された。さらに、『起信論』には如来蔵という言葉を使って3いる部分もあるが、中心となっている概念は真如である」とし、『起信論』はその章ごとによって使われる概念が違うことを説明された。また、真如論は「華嚴系と『釈摩訶衍論』をベースとして『起信論』を理解する系譜に分かれる」と示された。次に、『起信論』の構造（宇井伯寿『大乘起信論』（岩波文庫）と自筆のノートを参照）と、『釈摩訶衍論』の構造（早川道雄『釈摩訶衍論の新研究』を参照）を解説された。最後に先生は、『起信論』は一元的な理論ではなく、重層化されており、大別すれば言語論（認識論）と存在論・救済論（迷いと悟り）の二重性が見られる、「無明は重要な概念であるが、『起信論』では十分に議論されず、重視していない」と『起信論』の問題点を指摘され、講義終了となった。

今回の講座は四月三日を予定しております。新規
聴講もまったく問題ありません。末木先生は、聴講
者の質疑応答にも分かりやすく対応して下さいます。
皆様の聴講申し込みをお待ちしております。なお、
本講座はリモート開催となっております、講義動画も受
講者に配信し、期間内であれば何度でも見ることが
可能です。詳細につきましては、「法華コモンズ」ホ
ームページからご確認ください。

講義報告

集中講座 全2回

「史実・尼僧蓄髮縁付

―ブツダ時代から現代まで―

講師 大竹 晋 先生

報告 澁澤 光紀

大竹晋先生には、前年度後期講座で「史実・僧侶
妻帯世襲―ブツダ時代から現代まで―」をご講義頂
きました。今回はその続篇として、尼僧の蓄髮と
縁付（結婚）についてお話頂きました。

男僧にしろ尼僧にしろ、出家僧に戒律で禁じられ
ている蓄髮や結婚を許しているのは、世界の中でも
日本だけです。前回の講座では、実はブツダ時代か
らこの問題はあったことを史実に基づき詳しく論じ
ながら、あらためて破戒を常態とする日本の仏教僧
の特異なあり方を再考させられました。

では、今回の「尼僧篇」はどうでしょう。今回は

明治六年（一八七三）の太政官布告「今より比丘尼
の儀も蓄髮肉食縁付帰属等、勝手と為すべき事」か
ら百五十年目の節目の年にあたるということで取り
上げられたのですが、尼僧の蓄髮縁付について男僧
目線での理屈と、尼僧の理想が大きく食い違ふなど、
男女性差によるギャップが改めて明らかになりました。
以下、精査した資料を豊富に呈示しての、史実
に基づく実に興味深い講義の内容を報告します。

第一回「海外編／日本篇Ⅰ：前近代、明治 大正」

海外編では、仏教徒を七衆に分けて、それぞれの
守るべき戒律を見ていきます。七衆とは、出家の「比
丘・比丘尼・式叉摩那（比丘尼見習い）・沙弥・沙弥
尼」、在家の「優婆塞・優婆夷」です。このうちで尼
僧とは「比丘尼・式叉摩那・沙弥尼」に対する中国
式の総称になります。

七衆の守る戒律として、学処（学ぶべき道徳律）
と戒（道徳性）がありますが、まず蓄髮について、
インドでは尼僧の蓄髮は禁止、しかし中国では身体
髪膚を傷つけない儒教倫理から、唐の時代に尼僧の
蓄髮が発生しました。縁付については、インドでは
学処によって出家者は絶対独身。中国においては北
魏の殺人教団「大乘賊」をひきいた沙門法慶の妻、
恵暉尼が文献上で尼僧縁付の第一号になります。
次に日本篇Ⅰの前近代です。奈良時代に鑑真が比
丘戒壇を伝えますが、比丘尼戒壇は平安中期の無量
寿院戒壇までは造られません。尼僧の蓄髮縁付も、
平安時代に発生しますが、鎌倉仏教の法然さえも尼
僧の蓄髮と縁付は峻拒しています。その後、放置状

態だった尼僧縁付は、江戸時代に禁止されます。

日本では、明治に入り尼僧の蓄髮縁付は太政官布
告によって解禁されます。しかし当初は、男僧によ
る蓄髮推進の主張があるものの、蓄髮縁付は忌避さ
れる傾向にありました。蓄髮の始まりは、大正二年
に『中外日報』に報じられた浄土宗の有髮尼僧・加
野操子からで、尼僧学校でも「剃髪せずとも入学を
許す」方針を出しますが、大多数の尼僧はこれに反
対します。しかし、既に僧侶の蓄髮妻帯を受け入れ
た浄土宗の男僧は蓄髮に賛成して、有髮の教師を育
成して男僧の妻として「夫婦共に僧籍に登録するこ
とを寧ろ歓迎」しました。

これに対して駒澤学園の尼僧は尼僧蓄髮論に反対
して、男僧達の墮落と清らかな出家への憧れをのべ、
「この円頂黒衣の装がどれ程私達の求道を助けてゐ
ることとせう」と語ります。全体的には、男僧は「精
神さえ僧侶なら、形式は俗人でよい」の精神の出家
論で、大多数の尼僧はそれを疑う、という構図です。
それでも大正時代には、尼僧蓄髮を公認する宗派
が増えて、縁付も男僧側から主張されていきます。

第二回「日本篇Ⅱ：昭和戦前戦中期 Ⅲ：戦後期」

尼僧蓄髮は、昭和戦前期に入り諸宗で広まってい
きます。浄土真宗では、男僧が住職でその妻が坊守
でしたが、幾つかの派で女性の得度と住職を公認し
て、有髮尼僧の住職が誕生します。日蓮宗では、昭
和八年の宗会に「有髮尼僧制度」が建議されるも、
撤回されています。また、同年には「児童虐待防止
法」が施工されて、児童のうちからの尼僧剃髪は児

童虐待ではないかとの議論も起こりました。

昭和十二年に日中戦争が起こると青年男僧が出征して減少、昭和十六年の太平洋戦争に入ると中年男僧も出征したため、諸宗当局は戦時下の法務の担い手として寺族女性を有髪のまま得度させることに決定し、有髪尼僧が誕生する。戦争により寺族女性の地位は向上して、戦後の寺族公認に至り、尼僧の地位は向上せずとも団結を教化して、戦後には諸宗尼僧法団や全日本仏教尼僧法団などが設立されます。

戦後においては、諸宗で戦死住職の未亡人が有髪尼僧となって増加します。有髪の尼僧を認める動きは、真宗大谷派、浄土宗など活発で、真言宗醍醐派は傘下の真如苑主・伊藤友司に、最高の大僧正位を有髪の婦人として初めて授けます。しかし、曹洞宗では有髪で僧堂に入った寺族姉妹をめぐって、有髪・剃髪の議論が激化します。

昭和四十五年頃より、尼僧側から蓄髪縁付公認の声が上がり、尼僧（独身）と女僧（婚姻）を区別する傾向も生まれて、「主婦僧（夫の代役）」という言葉も使われました。そして平成・令和に至ると、尼僧蓄髪公認は加速して、男僧住職の娘が尼僧となって世襲したり、後に縁づくことも多くなります。

こうした尼僧蓄髪縁付をめぐる歴史を閲覧して、大竹先生は「尼僧蓄髪縁付とは何だったのか」を問い直します。そして、ブツダは蓄髪縁付を否定しているのです、これは仏教からではなく社会的な要因に基づくとして、時代ごとの要因を挙げました。大正時代には、社会活動を容易にするため。昭和初期は、死亡男僧の妻を住職にするため。戦時と戦後すぐは

出征し死亡した男僧の妻を住職代理とするため。その後は聖俗の区別をつけるため、また男僧の娘に住職を世襲させるため、などとなります。

そして宗派としての対応として、尼僧蓄髪縁付の道をつつ走っているのは真言宗系の諸宗、次に続くのが天台真盛宗、そして足が重くなりつつある日蓮宗と曹洞宗がいて、あとの宗派はあえて進めていない状態だと分析しています。

また、近年の傾向として、寺住職は子供に世襲させる家業であり、「家を出ないための出家」という矛盾したあり方を指摘して、世襲を重ねた結果に僧侶が仏教に無関心になり、蓄髪世襲縁付が自然と感じられるようになったのではと示唆します。このことが、僧侶に対する俗人の聖者崇拜を失わせ宗門の将来を危うくする可能性があるとして、剃髪非婚尼僧の必要を提案しました。

そして、今後は「史実・近現代尼僧」「史実・寺族形成」の検証にも取り組みたいとの抱負を話されて、二回にわたる画期的な集中講義を終了しました。



大竹 晋 先生

講義報告

法華仏教講座

【令和五年度 前期】

第四回 三輪是法先生 第五回 坂井法暉先生

第六回 花野充道先生

【令和五年度 後期】

第一回 川崎弘志先生 第二回 久保田正宏先生

第三回 魚住孝至先生

本講座は法華コモンズの前身・本化ネットワーク研究会での講義形式を踏襲し、およそ月一回のペース、毎回二時間の枠で開催されている。講師は、斯界で注目されている学者・研究者を毎回交代制でお迎えしている。ここでは、令和五年度前期第四回、第六回、後期一回、第三回の講義について報告したい。各回ともに、常圓寺様祖師堂地階ホールを会場とし、Zoom実況配信を同時に行うハイブリッド型の対面式で講義が執り行われた。また、いずれの回も、土曜日午後四時三〇分からの開催で、仏教思想研究・日蓮教学研究の第一線で活躍する研究者をはじめ多くの聴講者が集い、時間を三〇分前後延長しての活発な質疑応答が行われた。なお、講義は全回、受講者にビデオ配信されている。

《令和五年度 前期「法華仏教講座」》

【第四回 三輪是法 先生】

令和五年（以下同）七月二十九日、立正大学教授で当学林教学委員の三輪是法先生による「一念三千の

現代的解釈」の講義が執り行われた。

三輪先生は、社会学・文学・生命科学・哲学から見た、「心」と「世界」の關係性を概観され、仏教と心の問題、仏教と精神分析の問題を検討する上での課題を指摘。「世界」に発散する「心」、「心」に収束する「世界」という焦点を提示され、「一念三千」を開示する『摩訶止観』巻第五第七正修止観章について、忠実な原義に基づきながら解説された。

天台大師智顛が闡明した「一念三千」は、法華仏教史上の最重要法門である。それは「不可思議なる対象として人間の心を表し、三千の法数は、法華經の十如是（現象界を形成する構成要因と原理）と地獄界から仏界までの十界、そして五蘊世間・衆生世間・国土世間の三種世間の乗数である。つまり、我々の心は本来具有している聖者を含めた十種の善悪の人格的要因（十界）と現象界（十如是）、さらに環境的外部要因を含めた存在の差異性（三種世間）の關係として成り立っている。

三輪先生は、この構図が、心に「他者」が存在していることを示していることに着眼。講義では、人間の精神（実体視される心ではなく、關係性の中か



三輪 是法 先生

ら誘発する精神というべきか）に焦点を当てた一念三千という理論を、精神分析が提唱する三つの視点、自我論と主体論、そして欲望論に基づいて考察を加え、『摩訶止観』と精神分析が示す人間存在と心について詳細に検討を加えられた。

法華教学の重要法門を、現代的に掘り下げて解明しようとする素晴らしい試みに、参加者一同、大変感銘を受けた。また、プロジェクトを用いた明快なプレゼンテーションであった。（布施義高 記）

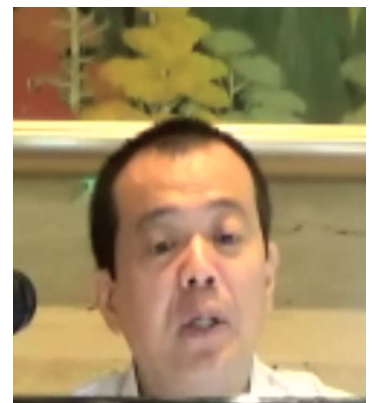
【第五回 坂井法暉 先生】

八月二六日、坂井法暉先生による「近世後期の日蓮信奉者 深見要言」の講義が、執り行われた。

本講義の視点として、坂井先生は「これまで注目されてこなかった人物に光を当てる」と述べて、その生涯を日蓮遺文の出版活動にささげた深見要言の事蹟について説明された。

講義はパワーポイントを使って進められ、深見が刊行した『本化高祖紀年録』や『法華童翫抄』などの資料を紹介し、深見の出身地や生没年などから説明が始まり、深見が行った日蓮遺文刊行がどのような活動であったのか、どんな人々との交流から活動が行われたのかなど深見の生涯を丁寧に解説された。また、坂井先生は深見の出身地である福島県いわき市など、深見のゆかりの土地へ直接足を運び、先生自らがカメラに収めた多くの写真を紹介して、深見を取り巻く環境について詳細にご説明くださった。

さらに、講義会場では先生が所蔵されている、実



坂井 法暉 先生

際に深見要言が出版した貴重な原本を聴講者にお見せくださり、資料を扱う際の注意点として、「どんなに高名な学者の論文であっても、その内容を鵜呑みにせず必ず原本の資料を確認しなければならない。なぜならば原本である資料が正しいからである」と、書誌学の専門家ならではの貴重なご教示をくださった。

坂井先生は、膨大な資料をもとに説得力のある説明をされながら、ときにユーモアを交えて聴講者の笑いを誘い、聴講者一同は興味深く先生のお話に聞き入っていた。講義終了後は、聴講者から熱心な質問が寄せられ、一つ一つに丁寧に対応された。

（西山明仁 記）

【第六回 花野充道 先生】

九月三〇日、法仏教研究会主宰・当学林教学委員の花野充道先生による「智顛教学と日蓮教学の仏身論の対比」の講義が執り行われた。

花野先生は、智顛教学と日蓮教学の根本的な相違を、実相論・仏身論、更には成仏論、本迹論などの視点から多角的に比較検討された。



花野 充道 先生

講義では先ず、智顛教学が【本有常住の理法を基調とする、法先仏後の多仏信仰】（本迹実相同）【寿量本仏も久遠の始覚仏】（本迹の仏身は俱体俱用・本迹不思議一）、対し、日蓮教学が【本迹の仏身に勝劣を立てる】（寿量本仏無始の古仏）（本迹実相勝劣）とすることを微細に解説された。その上で、日蓮の寿量本仏観には、種々の考証の視点があることを指摘され、本仏の有始（始覚）・無始（本覚）に関する問題、報応二身の顕本や三身常住、無作三身―等に関する問題を掘り下げて論じてくださった。論中、特に「本門の教主至尊と末法の導師日蓮との関係」を視点として、日蓮教学史に存在する三種（以下A～C）の一仏化導論を指摘されたことは興味深かった。

(A) 久遠に実相＝法身を証得した師匠の釈尊＝報身が、弟子の上行菩薩に妙法を付嘱して末法の衆生の救済に当たらせる。

(B) 久遠五百塵点に実相を証得した釈尊が、弟子の上行菩薩に下種の妙法を付嘱して末法の衆生の救済に当たらせる（一仏二名、その変形として

の互為主伴説)

(C) 久遠元初成道の仏が、末法の日本にそのまま日蓮として現われ下種の化導をなす（日蓮本仏論）。以上を踏まえ、花野先生は、日蓮の立場を「理智不二の仏身―法仏一体（人法一箇）」「観心の本尊＝本門の本尊―大曼荼羅＝本門の釈尊―一念三千即自受用身」とする見解を述べられた。

また、講義終盤には、『立正観抄』の真偽論争や、「思想史学と宗学の同異」についても論じられた。
(布施義高 記)

『令和五年度 後期「法華仏教講座」』

【第一回 川崎弘志 先生】

一〇月二八日、川崎弘志氏による「佐渡始顕本尊の研究（一）」の講義が行われた。

法華コンゴズでは、『法華仏教研究』第三五号（令和五年四月発行）に収録された、川崎弘志「佐渡始顕本尊」の研究」の内容を、著者より二回にわたり解説していただく予定である。その第一回目となる今回の講座では、身延曾存の「佐渡始顕本尊」につ



川崎 弘志 先生

いて真偽論を中心に詳細な解説をいただいた。

「佐渡始顕本尊」は、日蓮が文永八年七月八日に佐渡の地で図顕したとされ、身延山久遠寺に所蔵されていたが、明治八年同寺の大火により焼失している。然るに身延山久遠寺三三世遠沾院日亨の『御本尊鑑』などの写本に、同本尊の臨写が残っており、その内容を窺うことができる。

川崎氏は、『御本尊鑑』を含め多くの「佐渡始顕本尊」の写本及び関連資料の図解を紹介し、諸写本における諸尊勧請の配置や讃文の記述、花押の形状などの諸点の相違について精密に検討し、七点の偽筆理由を挙げて同本尊が偽筆であると推定した。

昨年、川崎氏が「佐渡始顕本尊の研究」を発表して以降、各方面から反響が寄せられたとのことである。論題が「本尊の真偽論」である以上、論争の惹き起は至極当然であろう。川崎氏はそれらの反響の声に對し、「日蓮の真実を追求する」という信念のもと、一貫して資料をもとにした学術的態度をもって返答している。第二回目の講座も大いに期待されることろである。
(西山明仁 記)

【第二回 久保田正宏 先生】

一月二五日、久保田正宏先生による「四明知礼の実相論とその展開」の講義執り行われた。先生は、早稲田大学や立正大学でも教鞭を執られる、斯界注目鋭い研究者である。

今回の講義では、十世紀から十三世紀にかけての



久保田 正宏 先生

宋代(Ⅱ趙宋代、Ⅲ北宋代と南宋代)の中国天台教
学の実相論に注目され、「最も実在論的とも言える実
相論(一念三千論)を主張した」という中国天台第
十四祖、四明知礼(九六〇〜一〇二八)の学説を中
心に、山家・山外の両派の学説の特徴を今日的に最
先端の研究レベルで概説してくださいました。
講義に入ると、まず、その全体的な構図や特徴を
分かり易く概説され、次いで、特に「蛞蝓六即説」
「寂光有相説」を取り上げながら実相論の展開につ
いて、更には教判論との関連について、極めて重要
なポイントをご教示くださいました。

各項目が非常に専門的かつ高度な内容であり、「お
わりに」では、貴重なご所見を次のようにまとめて
くださった(以下、レジュメより転載)。

「◆山家派においては、北峰宗印のように、結果的
にはあるが、山外派の唯心論的実相論に接近する
学匠が存在した。一方で、柏庭善月のように、知礼
の実相論(理事両重総別説)をあくまでも堅持する者
も存在した。○宗印などⅡ「唯心観体」、「寂光土の
相は浄相のみ、(唯心寂光)」○善月などⅡ「当体全

是」、「穢土の相がそのまま寂光土の相」◆山家派に
おいては、宗印のように、山外派と同様に『大仏頂
首楞嚴經』を法華涅槃時に判属する学匠が多く存在
した。一方で、善月のように、同経を方等時に判属
する諸師もいた。○宗印などⅡ法華涅槃時(醍醐味)
判属説○善月などⅡ方等時(生酥味)判属説」と明示
され、「山家派における実相論と教判論とは連動して
いると考えられる。」

先生の、広く、奥深い考証に、聴講者一同から感
嘆の拍手が送られた。
(布施義高 記)

【第三回 渡辺麻里子 先生】

一二月二日、大正大学教授・渡辺麻里子先生によ
る「日蓮僧の中世天台寺院における修学 ―身延山
久遠寺身延文庫所蔵資料からの検討―」の講義が執
り行われた。

渡辺先生は、天台宗の未刊行教義書や身延山久遠
寺身延文庫聖教の調査に関わり、その最新の研究成
果に基づいて、貴重な内容をご講義くださいました。

中でも、今回は、特に、身延山久遠寺身延文庫聖
教所蔵の諸資料によって、武蔵国仙波北院(喜多院)、
武蔵国金鑽大光普照寺、近江国成菩提院、近江国園
城寺など、天台の談義所、学問寺として著名であつ
た寺院における日蓮教団の学僧の修学の様相を具体
的に講じてくださいました。

中世に学問所として機能していた天台系寺院は、
比叡山の焼き討ち後の復興、その後の度重なる罹災
など、当時の資料が遺っていない場合が多く、身延
文庫所蔵の資料は現在、中世の天台学を解明する貴



渡辺 麻里子 先生

重な資料と位置づけられていることを極めて具体的
にご教示いただいた。

また、先生は、はじめてこうしたことに触れる受
講者のために、中世天台談義書や天台談義所に関す
る基礎、代表的な法華経談義書や三大部談義注釈書
などについても詳細にご教示くださいました。

講義中盤からは、中世における学問の様相を、特
に、尊舜や身延山第一二世日意(一四四四〜一五一
九、天台名・泰芸)を例に取って詳説され、講義の
終盤では、『三大部廬談』の内容・構成、そして、身
延文庫蔵本などについて、委細にご教示賜った。

配布レジュメがA4紙三〇枚からなる膨大な分量
であるにも関わらず、話の運び方が巧く、二時間内
で、しかも分かり易くすべてを伝えてくださいました。
練られた内容と弁舌の爽やかさから、二時間の講
義は瞬く間に過ぎ去った。

日蓮門下の教学の歴史を考究する上で極めて重要
な内容であり、コモンズで本講義を執り行わせて頂
けた意義は甚大である。
(布施義高 記)

『法華経』 『法華文句』 講義

報告 編集部

本年度は、昨年の三月から「譬喩品」に入り、今年一月の通算六十八回目となる講義でも、まだ「譬喩品」が継続中です。

この「譬喩品」の三車火宅の喩えは、次の「信解品」の長者窮子の喩えと、「菓草喩品」の三草二木の喩えと連続していて応答の関係にあります。テキスト『法華文句(Ⅲ)』の裏表紙にある菅野先生の説明を参考に、経文の流れをおさらいしておきます。

「釈尊は、「方便品」で一仏乗の教えを声聞たちに説いたのですが、それを理解できない中根の声聞たちのために、三車火宅の喩えによって一仏乗の教えを説明します。この三車火宅の譬えで一仏乗の教えがようやく分かった声聞たちは、自分たちが理解した内容を長者窮子の喩えに仮託して釈尊に表明します。釈尊は声聞たちの喩えを聞いて、その理解が正しいことを認めて、あらためて一仏乗の教えが声聞・縁覚・菩薩の違いを超えて等しく最高の悟りに導くことを、三草二木の喩えによって解き明かすのです。」

(菅野博史「法華経の七つの譬喩」を参照)
では、十月から始まった後期講座から今年一月までの四回分の講義を報告しましょう。

まずは【経文】の範囲とその内容にですが、舍利弗から再度の説法を頼まれた釈尊が、三車火宅の

喩えの「ある国の大長者が、ただ一門あるのみの広大な家に子供達と用人とともに住んでいたが、突然に火事となり、注意しても遊びに夢中の子供たちは逃げようとしぬい」と述べた次のところ「その時長者は即ちこの念を作さく」からです。

「その時に長者は、注意しても気づかない子供等を見て、方便によって玩具で誘って火から救おうと考えた。そして、門の外に羊の車、鹿の車、牛の車があるからそれで遊びなさい、好きなものを採っていいよ、と語った。それを聞くと子供達は先を争い門の外にでて火宅を逃れた。そして子供等が長者に約束の三つの車を欲すると、長者は子供等にもっと立派な大白牛車を平等に与えたのだった、と釈尊は譬喩を語り終わった。そして舍利弗に、約束の三車を与えず大白牛車を与えた長者は嘘をついたのだろうかと思ねた。舍利弗が、方便をつかって子供の命を救おうと考えた長者に虚妄などなく、まして子供達にもっと立派な車を与えたのですからと応えると、釈尊は、善きかな、如来もまたかくの如く一切世間の父であり、衆生の三毒の火を消して、方便によって最高の悟りを得せしめんとする、と説かれた。」

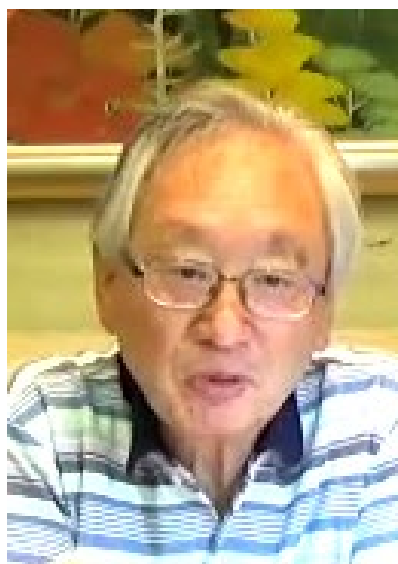
この経文の解釈として、テキストの『法華文句(Ⅲ)』の範囲ですが、六五〇頁の八行目の「私に総別を以て之を駁す。索は是れ求請の別名なり」から、六七二頁十四行目の「舍利弗如来亦復」の下は、第二に合譬なり。光宅は十譬を開く」までです。

科文でいいますと、「総じて破す」から「合譬」までとなります。この合譬というのは、譬喩を思想的 content に対応させることをいいます。一月講義の経文

の箇所であれば最後の「舍利弗よ、如来もまた是くの如し。則ちこれ一切有世間の父なりく教化して阿耨多羅三藐三菩提を得しめんが為なり」が合譬となります。経文には、「如来もまた是くの如し」に《合長者》、「教化して阿耨多羅三藐三菩提を得せしめん」に《合唯一門》と脇書きがされています。

このテキスト『法華文句(Ⅲ)』での内容については、講義レジュメの『法華文句』の解釈―天台の解釈に菅野先生の現代語訳が掲載されていますので、それを熟読して、なおかつ菅野先生の講義を聴講すると、どうにか内容が腑に落ちていきます。それほどテキスト内容を簡単に説明することは難しいので、ぜひ受講してご自身でレジュメを活用して理解して頂ければと願います。

「譬喩品」の読解は、ようやく半ばを終えたところですが。この講義では、天台の解釈を精密に学ぶことで、『法華経』の理解が刷新されていきます。オンライン受講の方も増えていますので、ぜひ受講申込みをお願いいたします。



菅野 博史 先生

山上弘道 著『日蓮遺文解題集成』について

日蓮はその生涯において著述・書状・要文集・写本等々、実に多くの文献を精力的に執筆し残した。それを門下は「聖教」「御筆」「御書」等と称して大切に保管し、あるいは筆者して後世に残すことに務めた。今日「日蓮遺文」として数多く伝来するゆえんである。ところがその一方で、その膨大な日蓮遺文の中には、日蓮滅後に日蓮に仮託して偽作された、いわゆる偽撰遺文が数多く含まれており、それは日蓮の等身大の思想と行動を知る上で、大きな妨げとなる。本書はそうした状況を踏まえて、第一の目的として、今日伝来する日蓮遺文一編一編に、できうる限り丁寧に考察を加えた上で、真撰・偽撰の分類を目指した。その結果本書で取り上げた五七三編の遺文中、「第Ⅰ類 真撰遺文」が三九八編、「第Ⅱ類 真偽未決遺文」が三〇編、「第Ⅲ類 偽撰遺文」が一四五編という分類結果となった。

(序文より抜粋)

【本書の購入について】

本書は 4/27 と 6/15 開催のcommons集中講座のテキストになります。ご購入希望の際は、郵便振込用紙にて代金送付で申込ます。下記の口座番号と名称を明記して、定価+送料 500 円の「13,500 円」をお振込み下さい。

- 口座番号 01230—8—3272
- 加入者名 記念出版委員会

なお、購入についてお問合せは、下記・興風談所にお問い合わせいたします。

興風談所 〒701-1133 岡山市北区富吉 2168 TEL086-728-5539

kofudansho@msc.bidlobe.ne.jp



日蓮遺文解題集成

本書の構成

(一) 第Ⅰ類 真撰遺文

ここでは、真撰完存・断存・會存の遺文はもとより諸状況から真撰と判断した三九八編の遺文を系年順に収録し解説する。

(二) 第Ⅱ類 真偽未決遺文

ここでは、疑義はあるが偽撰と断定できぬ遺文三〇編を真偽未決として収録し解説する。

(三) 第Ⅲ類 偽撰遺文

ここでは、偽撰遺文二二七編(偽筆遺文二二編「口伝」・相伝類一〇編「門下作成書」・後日蓮遺文化一六編、都合一四五編を偽撰遺文として収録し解説する。

(四) 付録

(一) 遺文目録

① 常修院本要教録録・② 新定書目録攷異など、二十八点の諸目録を翻刻・収録する。

(二) 書状花押集

日蓮書状の押一・二六点を系年順に記し掲載。

(三) 宗祖書状花押の研究(興風二九号)参照

(四) 偽撰遺文に類出する用語

「無作一身」・「本覚」・「当体蓮華」・「一心三觀」・「授職灌頂」等の用語十点を解説する。

著者紹介

山上弘道

一九五二年、東京都出生。富十門流傳侶。興風談所所員。

主要な著書・論文

『日蓮の諸宗批判—四箇格言の再歴史化の前提—』(本化ネットワック叢書1・1011年)

『白蓮がこころ—法華経平等と法の思想—』(興命新聞社・1004年)

『日蓮大聖人の思想(一)』(1004年)

『日蓮の偽撰遺文の類型的分類試論』

『宗祖書状花押の研究』

『法華宗門流傳本山本成等所蔵の宗祖書状について』(立正安國館・断片について)

『宗祖書状花押の研究』

『宗祖書状花押の研究』

『宗祖書状花押の研究』

『宗祖書状花押の研究』

『宗祖書状花押の研究』

『宗祖書状花押の研究』

『宗祖書状花押の研究』

『宗祖書状花押の研究』

『宗祖書状花押の研究』

『宗祖書状花押の研究』

『宗祖書状花押の研究』

『宗祖書状花押の研究』

『宗祖書状花押の研究』

『宗祖書状花押の研究』

日蓮遺文解題集成

定価 13,000 円 (税込)

著者 山上弘道
発行 興風談所
令和 5 年 12 月 13 日 第一刷発行
B5 判・上製本・箱・全 1322 頁

購読ご希望の方は同封の郵便振替用紙にてお申し込み願います(郵便振替番号 01230-8-3272)。送料は一律一冊 500 円で申し受けます。ご不明な点がございましたら、下記・興風談所までお問い合わせ願います。

興風談所 〒701-1133 岡山市北区富吉 2168
TEL 086 (728) 5539 kofudansyo@msc.bidlobe.ne.jp

法華コモンズ仏教学林 前期講座一覧

2024(令和6)年度 前期講座 開講:4月~9月

《 対面講義が不可の場合は、開催日時でのオンライン講義、または講義動画配信にて開講します 》

●すでに終了した講義も、動画配信等で受講できますのでお申込み下さい●

●集中講座 『日蓮遺文解題集成』の解説 全2回【対面&実況】 講師：山上 弘道
開催日： 第1回講義：4月27日(土) / 第2回講義：6月15日(土)
開催時間：土曜日 午後1時30分~5時30分 【受講料】1期2回分7,000円、1回4,000円

●一日集中講座 韓国仏教の諸相 全1回【対面&実況】 講師：佐藤 厚
開催日：5月18日(土) 午後1時30分~5時30分 【受講料】1回4,000円

●仏教哲学再考② 『大乘起信論』を手掛かりに 全4回【オンライン講座】 講師：末木文美士
開催日：第1回 4月3日/第2回 5月8日/第3回 6月12日/第4回 7月3日
開講時間：水曜日 午後6時30分~8時30分 【受講料】1期4回分8,000円、1回3,000円

●歴史から考える日本仏教⑪ 「中世の臨終行儀—摂関期から日蓮の時代へ」 全5回【対面&実況】
開催日時：火曜日 午後6時30分~8時30分 講師：菊地 大樹
第1講 4月16日(火) 『往生要集』から往生伝へ—臨終行儀の原点—
第2講 5月14日(火) 規範的な死—臨終行儀の理想—
第3講 6月18日(火) 「正念」に失敗する—不安と臨終—
第4講 7月9日(火) 臨終行儀書と日蓮・日蓮宗
【受講料】1期4回分8,000円、1回3,000円

●一日集中講座 「臨終行儀の今—変貌する死と儀礼」 全1回【対面&実況】
開催日：8月31日(土) 午後1時30分~5時30分 講師：菊地大樹 × 大谷栄一
【受講料】1回4,000円

●連続講座 『法華経』『法華文句』講義 全6回【対面&実況】 講師：菅野 博史
開催日：第1回 4月22日 / 第2回 5月27日 / 第3回 6月24日
第4回 7月29日 / 第5回 8月26日 / 第6回 9月30日
開講時間：月曜日 午後6時30分~8時30分 【受講料】1期6回分12,000円、1回3,000円

【会場】新宿常円寺 祖師堂地階ホール 新宿区西新宿7-12-5 電話03-3371-1797(寺務所)

【申込】受講講座名・氏名・住所・連絡先を明記して送付 ⇒ FAX:042-627-7227

mail:hokkecommons@gmail.com / ブログ:<https://hokke-commons.jp/>

192-0051 八王子市元本郷町1-1-9 善龍寺内 法華コモンズ仏教学林 事務局

賛助会員一覧（敬称略）

個人会員 ※1口 一万円

6口	小松 正学	1口	株橋 祐史
6口	松原 勝英	1口	長谷川正浩
6口	中野 顕昭	1口	互井 観章
5口	鈴木 正巖	1口	澁澤 光紀
3口	西山 英仁	1口	鍋島 真永
3口	持田 貫信	1口	井出すみ江
3口	竹内 敬雅	1口	久保田正尚
2口	間宮 啓壬	1口	菊地 大樹
2口	菅野 博史	1口	匿名 希望

法人会員 ※1口 五万円

4口	立行寺	2口	本妙寺
2口	東洋哲学研究所	2口	善龍寺
2口	持法寺	2口	大久寺
2口	本國寺	1口	天龍寺

（以上、令和五年度分として）

特別支援団体

本多日生記念財団 36万円

※本多日生記念財団様からは、本学林の前身となる本化ネットワーク研究会の時代から、毎年継続して多額のご支援を頂いております。

◎皆さまの「賛助」支援に篤く感謝申し上げます。

●法華「 commons 仏教学林では、本学林の趣旨に賛同して運営の維持に協力して頂ける「年間会員」を、年度始めに募集しています。下記の要領にて受付中ですので、ぜひご協力のほどお願いいたします。

【年間賛助会員 加入申込み】

- 個人会員 1年間1口（1万円）
- 法人・団体会員 1年間1口（5万円）

《お申込み年度の特典》として

1、個人会員で6口以上の方には、会員のみ使える年間フリーパス受講証を差し上げます

2、法人・団体会員では2口で、誰でも使える年間フリーパス受講証を差し上げます

※「年間フリーパス受講証」は、開設の全ての講座を一年間にわたり受講することができます。

●お申込み頂ける方は、右の内容を書いて、表紙タイトル、また11頁下にあるメールアドレス、ファックス、ブログからお申し込み下さい。

★個人か法人か、また何口かを明記する。

★名前、年齢、住所、電話、ファックスまたはメールアドレスを明記する。

●直接にご加入・ご支援を頂ける方は、郵便振込用紙にて通信欄に口数をご明記の上、同封の振込用紙か、下記の口座にてお振込み下さい。

【口座名】 法華 commons 仏教学林

【口座番号】 00150071634712

「講座映像版」販売のお知らせ

○菊地大樹先生「吾妻鏡」と鎌倉仏教」6回

○池上要靖先生「初期仏教研究」6回

○菊地大樹先生「歴史から考える日本仏教」

①鎌倉時代を射程にいれて ②《頭密問題》を考える

③日本宗教史の名著を読む ④鎌倉仏教史の名著を読む

※①～④まで各講座それぞれ6回の講義

◎ダウンロード版：価格一万二千円（消費税込）

全6回講義の動画ファイルとレジュームPDF

◎DVD版：価格一万二千五百円（消費税・送料込）

全6回講義のDVD6枚組とレジューム印刷物

◆詳細はブログ(<https://hokke-commons.jp>)参照。

■【本化ネットワーク叢書】 頒価一冊二千円+送料

○叢書(2) 『九識説』とは何か』

○叢書(3) 『本門戒壇論の展開』

法華 commons 通信 第十二号

○発行日 二〇二四（令和六）年二月一六日

○編集発行 法華 commons 仏教学林

○発行所 法華 commons 仏教学林 事務局

一九二〇〇五一 東京都八王子市元本郷町二一九

【FAX】 042（627）7227